

北海道・札幌冬季競技団体連絡会議 議事録

日 時	令和 6 年 6 月 25 日（火） 10 時 30 分～12 時 00 分
場 所	札幌市役所本庁舎 18 階 第二常任委員会会議室
議 題	(1) 北海道・札幌冬季競技団体連絡会議について (2) 第 2 期札幌市スポーツ推進計画（案）におけるウインタースポーツ普及の取組について（意見交換） (3) さっぽろスノースポーツフェスタ 2025 への協力について (4) 総合型ハイパフォーマンススポーツセンター誘致への取組について
出 席 者	別添のとおり
配布資料	別添のとおり

発言者	発言要旨
1 開 会	
中田部長	本日はお忙しい中お集まりいただきまして誠にありがとうございます。定刻となりましたので、ただいまより北海道・札幌冬季競技団体連絡会議を開催いたします。 私は進行を務めさせていただきます札幌市スポーツ局推進担当部長の中田でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。 初めに、配付資料の確認をさせていただきます。 ・議事次第 ・資料 1 座席表 ・資料 2 出席者名簿 ・資料 3 （議題資料）北海道・札幌冬季競技団体連絡会議資料 ・参考 1～3 北海道・札幌冬季競技団体連絡会議について それから欠席者についての情報提供でございます。お手元の資料に出席者名簿がついておりますが、右端に出欠の状況を記載しております。欠席と書かれている連盟 3 団体でございます。それぞれ名簿の方で各自ご確認をいただければと思います。 それでは開会にあたりまして、初めに勝木会長の方からご挨拶をお願いしたいと思います。
2 勝木会長あいさつ	
勝木会長	どうもおはようございます。今日のご出席をいただきましてありがとうございます。昨年までこの会議は、北海道オリパラ招致のための行政とそして経済界と我々スポーツ団体が連携をとりながら、機運醸成をしていこうというのが、目的でありました。あわせて、それぞれの競技で、優秀な選手をどんどん育成していこうということが目的でありました。

	残念ながらオリパラはああいう形になりましたが、我々の本来のスポーツの普及、それから強化というものは本当に重要だと思っております。 例えば、スキー連盟で言うと、アルペン少年団、それからジャンプ少年団スケートでも同様の団体があります。そういう団体の大会に行きますと、本当子供たちが一生懸命競技をしています。練習をしています。子供たちに聞くと、将来はオリンピック・ワールドカップ・国際選手権に出たいという大きな目標を持っております。そういう子供たちのために我々冬季スポーツの振興を進めていきたいというのがここにいる方の皆様のご意見だろうと思っております。 それから、古くから使われる北海道札幌のキーワードとして「北の大地」「食と観光」が使われます。全てにこのキーワードというのはプラスに働き、マイナスにも働く。ただ、それを連携することによって、大きなプラスになっていくというのが、北海道・札幌市の考えだと思います。 そういう中で、これらのキーワードに「スノーリゾート」、「スノースポーツ」をかけあわせることで新たな北海道・札幌の可能性を見出すことができます。そういう中で、我々スポーツ団体も、きちっとその一役を担っていく必要があるだろうと考えております。 今日はこの従来の名前を「北海道・札幌冬季競技団体連絡会議」というものに変えさせていただきます。 それといろいろそれぞれの団体にお考えがあると思いますので、忌憚のないご意見をいただければというように思います。 よろしく願いいたします。
中田部長	勝木会長どうもありがとうございました。続きまして、梅田局長からご挨拶をお願いいたします。
3 梅田局長あいさつ	
梅田局長	札幌市スポーツ局長の梅田でございます。本日はお忙しい中お集まりいただき、また日頃より札幌市のスポーツ行政に多大なるご理解ご支援、ご協力を賜りますことをこの場をお借りして深く感謝申し上げます。 今、勝木会長からお話がありました通り、これまでの連絡会議は冬季オリパラ招致を目指して機運醸成、あるいはアスリートの発掘育成について意見交換を行うということを目的に活動してまいりました。これまで本当に皆様に様々な面でご協力をいただきましたことを改めてお礼を申し上げます。 昨年12月、冬季オリパラ招致活動については停止という決断をすることになりました。今後は札幌市といたしましては、札幌市のまちづくりの目標である世界屈指のウインタースポーツシティの実現、これを目指して取り組んでいきたいと思っております。 これまでの10年間に及ぶ招致活動の中で私ども行政と競技団体の皆様と様々なあの夢の実現に向けていろんな意見交換、そして取り組みをともに

	行ってまいりました。 我々はこの10年間の色々な活動取り組みを無駄にしてはならない、ということで、将来に向けてもしっかりとこのウインタースポーツシティ札幌そして北海道の発展のために、引き続き力を合わせていかなければならないと思っている次第でございます。 今日のこの連絡会議の新しい目的について、後ほど説明がありますけれども、世界屈指のウインタースポーツシティの実現とその効果を全道各地域に波及させるということがこの会議の目的でございます。新しい委員もお迎えをしまして再スタートをする事になりました。 皆様におかれましては、このウインタースポーツシティ札幌の実現に向けて、裾野の拡大、そしてアスリートの発掘育成、さらには大会の誘致、こういったところで、情報共有をしていただいて、北海道札幌におけるウインタースポーツの更なる発展に繋げていただければというふうに考えている所存でございます。 どうぞ本日よろしくお願い申し上げます。
中田部長	梅田局長どうもありがとうございます。 それではここからの議事進行につきましては勝木会長にお願いしたいと思います。
4 議 事 (1) 北海道・札幌冬季競技団体連絡会議について	
勝木会長	私の方から議事に移ってまいります。議題が4点あります。 まず1点目、北海道・札幌冬季競技団体連絡会議について事務局から説明をよろしくお願いいたします。
中田部長	資料3に基づき説明
勝木会長	ありがとうございました。後ほどご意見・質問をいただく場面を作りますので、議題を進めていきたいと思います。 続きまして2番目の議題として第2期札幌市スポーツ推進計画(案)におけるウインタースポーツ普及の取組について事務局からご説明いただきたいと思います。
5 議 事 (2) 第2期札幌市スポーツ推進計画(案)におけるウインタースポーツ普及の取組についてウインタースポーツ振興に向けた取組について	
金谷部長・中田部長	資料3に基づき説明
勝木会長	ありがとうございました。では、今までの説明を踏まえて委員の皆様にご意見等をいただければと思います。
五十嵐委員	札幌ボブスレー・スケルトン連盟の五十嵐でございます。残念ながら今お話あったように、札幌の冬季オリパラが招致を断念とは言わず、停止をしているという状況ではありますが、こういった活動は、今終わるわけではなく、改めて将来に向けて、やはりこの札幌という積雪寒冷地の中での冬季オリ

	ンピックは改めて開催できる、その素地を作っていくことが今大事ではないかと、そんなふうに思っております。 しかしながら、私どものボブスレー・スkeletonの現状をお話しますと、既に今、札幌オリンピックで行われた競技施設、フズにあるリュージュのコースの一部だけが残っておりまして国内大会であり、国際大会に選手を派遣する状況ではございません。そういった意味では札幌市に対して今回のこの動きを通じてフズの施設整備を可能な限り求めたいと日頃から北海道ボブスレー・スkeleton連盟の石川会長もおっしゃっておりますが、そういったところから選手の育成であったり、または、ソリは子供が雪に触れる一番最初の遊びから入るもんですから、そういったものがしっかりとこの積雪寒冷地の札幌、北海道に根付いていければと、そんな思いであります。
小野委員	私は北海道カーリング協会の副会長で今日は会長が来られなくなり大変申し訳ございません。一方で札幌市のカーリング協会の会長もやっております。 今回のご説明大変ありがとうございました。このような計画を策定し次に進めるというお考えには大変賛同いたしますし、できることであれば、できるだけ協力したいと思いますので、よろしく願いいたします。その上でいくつかお聞きしたいことがあります。 1点目は、最初にご説明がありました北海道・札幌冬季競技団体連絡会議と札幌市の第2期スポーツ推進計画ですが、この両者は一体どのような位置づけになっているのでしょうか。つまりこの連絡会議がこの推進計画の中でどのような役割を果たすべきものとして考えていらっしゃるというのを伺いたいと思います。 2点目は、このスポーツ推進計画について、これがもし札幌市民の全ての市民を対象とした計画であるとすれば、例えば札幌市のこれからの人口動態ですとか考えますと、高齢者やハンディキャップの人たちを含めた内容が当然盛り込まれるべきと私は考えておりますが、それについての言及はございませんでしたので、どのように考えてらっしゃるかお伺いしたい。 また、普段から考えることですが、いわゆるオリンピックオリンピックとか、ここから出すためにですね、いつも困ってるのは個人競技、チーム競技いずれも、例えば高校大学まで続けていたプレーヤーが札幌や北海道で出ることができない。そういう問題がおそらく他の競技団体でもあると思うんですね。 職場ですとか大学ですとか、経済的なことといったそういうバックアップをしなければ、プレーヤーは継続できず、オリンピックに出るのはカーリングでいうと30代がピークですので、そこまでどうやって札幌や道内で、目指して見直すべきかっていうそういった視点ですずっと考えておりますので、検討お願いいたします。

金谷部長	それでは私の方からご説明させていただきます。まず連絡会議とスポーツ推進計画との関係で申し上げますと、この連絡会議の中で議題として取り上げることとしております国際大会の誘致、冬季競技の普及振興、アスリートの発掘・育成といったものが、全てスポーツ推進計画の中でも取り上げられるというものでございますので、この計画の中で網羅されてるものがこの連絡会議の中でも議題として取り上げられているということになります。 それと、今日ご説明した部分につきましてはウインタースポーツに限ってご説明させていただきましたが、スポーツ推進計画の中には、当然全ての世代の方、あとは障がいのあるなしに関わらず、全ての方に対してスポーツをどのように普及・振興させていくかっていうことが計画の中に盛り込まれており、今おっしゃっていただいたようなことは全て取り組むべき事項ということでお年寄りまで含めてスポーツをいかにやっていただくかというような計画になっております。
勝木会長	私の方から補足をします。札幌市のこの考え方は、短期目標から最終目標まで作ってくれたのですが、大会を運営したり、誘致をしたりというのは、我々競技団体が先頭をきってやるということになる。それにおいては、本当に連携をとりながら推進していくことが必要だと思っております。 それから、ウインタースポーツの実施率ということで、18.9%から30.0%にしたいと。これは、団塊の世代がまたスポーツをしたいということで、スキーを始めたりいろんな高齢者がやるケースが増えてきております。ですから普及活動の中で、子供たちも含めて、そして高齢者も含め、外に出てやれるスポーツというもののベースを守りたい。 それからオリンピックをオリパラという形であえてパラを入れたということは、身障者にもきちっと楽しんでいただけるウインタースポーツの概念はしっかりとこの打ち合わせでもあるということとはご理解いただきたい。 それから３点目のオリンピックということに関しては、例えば北海道の下川町や上川町で小さいときから競技を実施し、全中で優勝をして、そして地元の大会で優勝してというように、オリンピックに行く段階が綺麗にできていてそういう中で、札幌の出身の人たちが、例えば長野へ行ったり、山形に行って活躍してオリンピックに出る、これはやっぱり我々経済界も含めてこの最終国際強化選手まで作り上げるそのシステムが弱かったなと感じております。そのため、NF（中央競技団体）という全国組織と地域型連携をしていいということが、それぞれのスポーツ団体でも大きな課題かなと理解しております。
瀧澤代理	北海道バイアス連盟の瀧澤と申します。本来であれば会長が来るところですが、業務の関係で理事長である私が参りました。札幌市の計画に対してできるだけお手伝いできればというところであります。

	北海道バイアスロン連盟としては、今現在、少子化に伴って、選手もだんだん少なくなっているというところもありまして、U15のトライアル等を実施し、各イベントでバイアスロンがこういうもんだよというところで参加しているところもあります。 子供たちを中心にバッチテスト、バイアスロンクリニック等を実施し、底辺の裾野をできるだけ広げればというところで動いております。
出口委員	札幌バイアスロン連盟の出口と申します。 先ほどご説明がありましたオリンピック招致が終わって、これで終わるのかと思ったらちゃんとまた継続して取り組みをされるということで本当に競技団体としてはありがたく思っております、4つの取り組みについてもできるだけ協力したいと思っております。 その中には短期的な目標まで具体的に挙げていただいて、本当に私達も目標はできるんじゃないかというふうに捉えました。例えばワールドカップという話がありましたが、バイアスロンで言えば、アジア地区で1戦だけやるとなるとなかなかヨーロッパから来るっていうのはものすごい障害になってるんですけども、段階としてアジア大会を2017年開催していただいたのは、非常に盛り上がりまして、もし可能であればアジア大会をもう一度呼んでいただく、その前提としてアジアの中では、アジアバイアスロン選手権というのをやってみました。 アジアバイアスロン選手権は毎年持ち回りでやることができたんですけども、こういうものからまず始めていただいて、私達の責任でもありますけれども、それからアジア大会を開催する。アジア大会の成果というものはすごい日本オリンピック委員会等の評価が高い。オリンピックに次ぐような評価をされますので、私達競技団体はそれを非常に望んでおります。 それからもう一つこれは質問にもなると思うんですけども、将来的にNTC（ナショナルトレーニングセンター）的なものを作ろうという構想もしつかりできてますが、いきなりそれを作るっていうのは結構難しいところもあると思うので、私の本当に私的な意見からすると、札幌ドームを利用してですね、冬のスキーコースをドームの中にですね雪が常にあるところを作っていたきたい。ほとんどの主要な国、ウインタースポーツに強い国は大体スキートンネルっていうのを作っていて、冬に雪を溜めておいてそれを伸ばして使うとか、あとは冷蔵庫のような装置を下にパイピングを作っておいて、雪を伸ばして使うとかやると案外経済的な雪のコースができるっていうこともありますので、もちろん一般の市民の方や観光客の方にも常時開放して利用できるような施設を作っていただくと、競技団体としては非常に強化にも繋がる、それから人を呼べるっていうようなことを思っていますので、もしご検討いただけるというか、そういう場面があれば、活用していただきたいというふうに思います。 あと、札幌バイアスロン連盟の理事長も来てますので、選手の育成につい

	てお話をさせていただきます。
西田氏	バイアスロン連盟の理事をやっております西田と申します。 現在のバイアスロンスクールと、それから札幌市スポーツ協会の協力いただきまして、市民大会とかを行っております。また、先ほど会長も言ったとおり、少年団も実際に動かしております、その少年団が活動する上で、一つ要望あげたいなというふうに思ってます。叶うかどうかわかりませんが一応提案ということです。 今クロスカントリースキーを取り巻く環境ってあまりすぐ入りやすいとか、すぐ練習しやすい、すぐ通いやすいっていう場所が非常に少なく、今どこで練習してるかという、南区常盤200番地の真駒内カントリークラブを利用させていただいております。それから札幌クロスカントリー少年団は白幡山で、それからジャンプ少年団の方は荒井山でジャンプを飛んで、その他の場所でやっているというところで、クロスカントリースキーをもう少し日常的に使える場所または放課後使える場所を、そういった公共場所を使って作れないかなと思っております。 週末は当然親の車で白幡山ですとか滝野公園に通って練習してるんですけども、平日なかなか通うにはちょっと遠い場所が多いもんですから、例えば、真駒内公園の裏の桜山公園ですとか、地下鉄で通う、または冬のスポーツじゃないサッカーや野球、バスケット、バレーなんかの屋外のスポーツの方も、冬のオフトレ、クロストレーニングっていうことでよく大会に出てるケースが多いです。 そういったことも含めてウインタースポーツに取り込んでいくためにまずその環境がもうちょっと近くにあると嬉しいというふうに思っております。 先ほど言いましたように、今指導者のマンパワー一つでやってるところが多いのでこういったことは行政のシステムに加えていただければ、非常に助かるというふうに思っております。先ほど言いましたように真駒内公園の駅前が今度改修されて、非常に市民が使いやすい形になっているのに合わせて、そういった施設を作ることで、より環境と一体になって進めることができるのではないかというふうに思ってますので、ご検討いただければと思います。
勝木会長	最後にお話がありましたクロスカントリー、それから歩くスキー、それからバイアスロンの走る部分というものを身近にしていこうということで、実は次の話題で出てますスノースポーツフェスタというものが大きく関係しております。 都心のスポーツということで1回目は大通公園でやっています。それから2回目はコロナということもありまして、真駒内の公園の周りでやってみよう。そして今年は豊平川の河川敷でやりました。 これを今後、利用頻度が問題になっている札幌ドームの外周を使うこと

	ができないかということで、企画をしております。 そういうふうに市民が触れる場面、それから簡単に参加できるような形をして、ヨーロッパ風のクロスカントリー的なものにしていきたいというように思っているのが1点と、それからバイアスロンに関しては、皆様ご承知のように90年ほど続いております宮様スキー大会の主要種目としてバイアスロンが活躍をしていただいています。 こういうことについてもウインタースポーツの主力だということで、ヨーロッパ風にどんだんいろんな大会を企画されることに我々全体で協力していくべきだろうというように、私は考えております。 そういう意味でちょっと最終的な返事になってないと思わないですけれども、そういう動きでやっているということで、局長よろしいですか。
梅田局長	ありがとうございます。 札幌市といたしましても例えばクロスカントリー、身近なところでクロスカントリーができるようにということで、中島公園を初め、大体各区1ヶ所を大規模公園でクロスカントリースキーの貸し出しをやってますけども、あわせて今おっしゃられた趣旨はアスリートの発掘育成というもう一段上の段階だと思うんですけども、まずは裾野拡大し、そして日常的に身近なところでできるだけ練習ができるように、なかなかこの冬季競技というのはですね、あの野球やサッカーと違って、身近なところであるというのは非常にハードルが高いスポーツが多いんですけども、その中でもできるだけ利便性の高いところで選手が競技に参加をし、そしてトップアスリートを目指していけるような、環境作りというものを私どもも作っていききたいと思ってございますので、また具体的提案があれば私どもいつでもご相談に乗りたいと思ってますので、よろしくお願い申し上げます。
外崎委員	札幌アイスホッケー連盟の外崎と申します。本日はよろしくお願い致します。 まず昨年、推進計画の中だと思いますが、スポーツ局の方で、オリンピックズキャラバン事業ということで企画していただいた部分を連盟としまして実施させていただきました。その内容としましては、連盟としては初めての試みでありましたが、ジュニア世代の競技力向上に非常に大きな影響を与えたと思っており、またオリンピック選手やトップアスリートと子供たちの交流をする場として、子供たちがオリンピック選手やトップアスリートのようになりたいと思いを膨らませる機会となったというふうに思っておりますので、ぜひ、これを継続していただければ非常に子供たちに対し大きな夢を与えてくれるんじゃないかなというふうに思っております。 またオリンピックが今回残念ということでございますが、女子のアイスホッケーチームについてお話をさせていただければというふうに思っておりますが、2月に国内でミラノの出場権をかけてですね、大会が開かれることが決定しました。

	ただ場所は未定となっておりますが、女子につきましては、背景としましては、1998年の長野で正式に種目となり、日本は開催国枠で6か国出場した中で、最下位という形になっておりました。 それからソチ大会で悲願の出場という経緯になり、直近では北京大会で6位という結果を残しました。その中で、札幌の出身選手が3名選ばれており、今の状況というのは、カナダ、アメリカの二強が変わらず、トップで走っている中でですね、ヨーロッパのチームが混戦を極めている状況でございます。日本は7位という形になっております。これもロシアが参加すると非常に難しい状況にはなるかと思えます。 ただ、国内の大会といいますと、非常に少なく、日本リーグ、全日本選手権ということで大きな大会が2大会という形で非常に少ない状況の中、また国内のトップチームは事業団チーム、プロチームがなく、複数のスポンサーが活動費をサポートし、選手個人が月謝を払っているような状況で活動しております。 その中で、日本アイスホッケー連盟としましては、育成の中期計画としましては、各カテゴリー、U-14（12歳から14歳）、U-16（14から16歳）、これにつきましては、全国でブロックキャンプを実施し、一貫指導を目的として地域の指導者と連携をしながらスキルアップすると。U-18（15歳から17歳）はシニア代表に向けた準備、これはチームの海外遠征、少人数での海外スキル派遣、トップ選手においてはシニア代表への飛び級、シニア代表につきましては、活動環境をサポート、選手の就職、海外留学、海外チーム移籍などのサポートをするというような形で中期計画を図っております。 札幌市内におきましては、中学高校のチームがなく、すぐに一般の女子チームに所属ということになっておりますが、連盟としましては中学校高校のカテゴリーを強化練習として行いスキルアップを図っている状況にあります。 今後とも状況としては、なかなか難しい環境にございますが、ぜひともまたスポーツ局様の方で、スポーツ推進計画を施した中でですね、連携をとっていききたいなというふうに思っております。
浅香委員	札幌市障害者スポーツ協会の浅香と申します。 最初の説明を聞いておりまして、8ページの大規模国際競技大会誘致に向けた取り組みのページがあるんですけども、障害者スポーツ、特に冬季競技にすると、全く大規模国際競技大会というよりも、国内の総合的な競技大会が皆無なもんですから、うらやましいなというふうに思っていました。 東北・北海道ブロック団体長会議なんかではですね、雪国なんですけれども出れない県があるかもしれないけども、国内の総合冬季スポーツ大会をしたいね、と顔を合わせるたびに言ってるんですけども、なかなかどうやって動いたらいいのか分からないもんですから、本当に試行錯誤してるんですけども、国際大会に限らず一歩二歩三歩下がって、障害者スポーツに限って

	でも結構なんですけれども、札幌市と北海道さんが手を取り合ってますね、最初から全種目をするっていうとやっぱりハードルが高くなると思いますので、最初は二種目三種目ぐらいで。数年後にはもう一つ加えようとしていただければ障がい者の冬季スポーツ競技人口も増えてくると思います。 一般市民の方、障害者の方で、冬季スポーツって何をやってるんだろうなっていうことすら知らない方が大多数だと私は思っておりますので、ぜひ取り組みにもまた実現に向けた何かお考えをこれから出していただければありがたいと思っております。 余計な話ですけども、今本当に冬季のパラリンピックに入れる札幌市の選手はゼロです。だから30年、34年にもし実現したとしても多分いないんじゃないかなっていうふうに個人的には思っているところです。 ここ2、3大会のパラリンピックの選手を見るとですね、冬はアルペンだとかクロスカントリーだとかスケートをして、夏は陸上競技、マラソン等雪のないところでできるスポーツでトレーニングを積み重ねて、金メダルを取ってるっていう選手が多いので、その点幸いにも、今障害者スポーツセンターの建設に向けたお話もだいぶ調整されて来ていますのでありがたいなと思っておりますので、そういう取り組みも含めてですね、ぜひ進めていただければありがたいと思います。
武田代理	北海道障害者スポーツ協会の武田でございます。本日会長の代理で出席させていただきますいております。 いきなりちょっと質問になってしまうんですけども、ウインタースポーツの実施率が令和4年で18.9%というものだったんですけども、障害者についての数字って把握されたりしますでしょうか。
金谷部長	障がい者のスポーツ実施率については調査しているのですが、障がい者のウインタースポーツ実施率については特段調査というのはいない状況です。
武田代理	承知しました。私の肌感でいうと、おそらくこれより相当厳しい実施率なんじゃないかなと思うんですね。私どもも冬季大会実施しております、今年は2月に小樽で開催いたしました。そこの出場についてなんですけれども、これ冬季競技に限った話ではないんですけども、コロナ禍前後で今回の大会も5年ぶりにこの中で開催したんですけども、およそ半減してるんですね各競技が。 そういった状況の中で特にこの冬季はですね、比較的年齢層の高い選手がコロナ前は多かったんですけども、こういった方々がもうほとんどこのコロナをきっかけにやめてしまわれたっていうようなところで、非常に参加者の募集も苦慮したところだったんですけども、ただ今回、比較的若い、特に知的の選手が多く参加していただいて、皆さんほとんどの方が大会の出場が初めてだったということで、大変満足して帰られて、そういった機会がなかなかこれまでなかったんだっていうことを選手の親御さんからそうい

	う話を伺う機会があつて、もっとそういう機会が欲しいんだということをおっしゃられたのが非常に印象的でありました。 今話したように元々やってた方で、年齢を理由にやって辞めていく方がいるってなると、どんどん若い世代を取り込んでいかないと、実施率が下がってしまうと思うんですね。 こういった形でそういう世代を取り込んでいくのかというところで、今普及ということに関して言うと、特に障害者のことになると、それが大体の場所でイベントに置き換わってるんじゃないかと思うんですね。 イベントで障害の有無に関わらずっていうイベントがたくさんあつて、非常にそのイベントだけ見ると成功しているように思うんですけども、障害者がイベントの後に日常的にそのスポーツを日常的に継続して、そこから大会に出るといったところに繋がるようなところが非常に薄くなっているんじゃないかと、私どもも非常にそういったところをどうやって創出するかっていうのは日々頭を悩ましてると思うんですけど、冬季に限った話ではないんですけども非常に難しいところだと感じています。 そういう場所を作って成果を試す場として大会があつて、私達の大会も非常に参加しやすい大会で、身体・知的・精神の全ての障害者が年齢関係なく出られるように、また競技レベルに応じてランクが選べるようになっていような感じで開催しておりまして、非常に参加しやすい大会ですが、参加者は減っている一方だというような状況があります。 ぜひ札幌市さんの方でも、そういったところを、取り組みとして考えていただいて、ウインタースポーツフェスタの中のクロスカントリー大会でもパラの部分を設定してやっていただいていると思うんですけどもそういった機会をどんどん拡充していただけるような取り組みをお願いしたいと思います。
勝木会長	全日本障害者スキー連盟が、パラアルペンのワールドカップをティネでやりたい。そんなの無理だよと、周りで思ってたのも今回実現しましたよね、あれだけ海外から身障者の人が来てくれて、感動を与えてくれた。 それから今お話が出たスポーツフェスタの際も、子供たちが参加をしてくれてる。それから西岡のクロスカントリーも身障者が出てきてくれている。 あの姿をやっぱ多くの市民がいい意味で前向きでやっぱ応援する姿をやっぱ札幌市は作らないと駄目だろうと。それが人に優しいまちづくりの一環でもあつて、ウインタースポーツの優しさでもあるんだろうというように思っております。ただそこで、我々健常者の団体とどのように連携をとっていくか、ここの助け合いがやっぱ必要だろうというふうに思ってます。 パラアルペンのワールドカップのときも、健常者のスキー連盟の人間が設備から何か対応するというような形でやっていかないと、なかなか難し

	いというような気がします。 特に多くの市民の感動を与えるのは子供たちであり、場合によってはやっぱり身障者が頑張ってる姿っていうのを見せるべきだろうというように、私は思ってます。 そういう意味でいろんな連携をとって、健常者の団体も、協力しますのでより一層頑張っていていただければと思います。
鈴木委員	札幌スポーツ協会の鈴木でございます。私からは当協会で実施をしております札幌ジュニアアスリート発掘育成事業についてお話をさせていただきたいと思います。 先ほどスポーツ局の方からもご説明あった資料の7ページの施策18の下段の方にスポーツ施設を戦略的に活用したアスリート発掘・育成とあります。そこに関わるものでございます。 この事業は札幌市内の子供たちから将来性のある選手を発掘して適正を見出して種目別の能力を伸ばし、日本代表選手となって世界を目指すアスリートを育成するもので、令和2年度から実施しているところでございます。 この実施に当たりましては本日参加をいただいております競技団体の皆様方からも多大なご協力をいただいておりますのでこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。 現在の育成種目は冬季がスノーボード、スキージャンプ、カーリング、フリースタイルスキー、ノルディックコンバインドの5種目、夏季が陸上、バドミントン、テニスの3種目となっております。今年度は6月現在で発掘プロジェクトとして27名の子供たちが選抜されまして、基礎トレーニングや各種目の体験会を実施しておりますけれども、今後はですね、もっとトレーニングの機会を増やしたり、体験会の種目を増やしたり、大会や合宿などで経験を積ませたいと事業内容を充実させていきたいと考えております。 しかし、現在のところ受け入れ体制ですとか資金の面でハードルが高く、なかなか難しい状況がございます。元々すぐに成果が見えるような事業ではありませんけれども、このプロジェクトを卒業した子供たちがアスリートとなり一線で活躍するようになれば将来的に地元の期待に大きく応えることができるものと思っております。 このため、これからも長期的に安定して事業を継続していけるように、現在財源確保のためにスポンサーの獲得ですとか、クラウドファンディングの実施に向けて努力をしているところでございます。 皆さんにおかれましては、今後とも本事業の継続発展にご協力いただきますようお願いを申し上げます。
高野委員	北海道スポーツ協会の高野でございます 私どもはスポーツの包括的な団体ということもありまして、そんな観点からちょっと二つぐらいお話したいなと思います。

	まず今回、こういったオリパラ関連の連絡会議が新たにですね、名称を変えてスタートすると、オリパラに関しても開催意義についてはもう言うまでもありませんけれども、いずれまた機会がやってくるんじゃないかなというふうに思っております。 スポーツ全体、あるいはその競技力ということを見ても、ぜひまたこの活動についてはですね、連絡会議を通じてそういったところを意識しながら活動が続けていっていただきたいというふうに思うところが一つであります。 もう一つはですね、今スポーツを取り巻く中でやはり子供たちが大きく減ってると、先ほど勝木会長の方から話ありましたけれども、今年またオリンピックがあり、スポーツ盛り上がるだろうと道内からもオリンピック、また新たにたくさん出てきています。 ただその子供たちはですね、突然オリンピックが現れたということではなくてですね、やはり競技を始めるにあたっては、やはり地域の中の少年団活動、あるいはスポーツクラブ、そういったところで競技を始められて今日があるということなんです、私ども昨年創立90周年、これから100年を迎えるということで懇話会を開いて、課題について話し合ったということで、やはりその地域で育成する指導者だとかそういった力が急速に失われてきている。 私どもに登録しているスポーツ少年団の方もずいぶん減ってきてるというようなこともあって特にやっぱりこれから10年20年先っていうことを考えると、子供たちがスポーツに関わる環境を今からしっかり意識して考えていかないと、今現状ある国際競技だとかに取り組むに当たっても、将来的に言うとなかなかそこが細ってしまうと弱くなってしまうということがあるかと思います。 そういったことからやはり札幌市で大きく顕在化はしてない部分ではあるんですけども全体的に見るとやはりちょっと大きくその部分が出てきてまして、そういったところに目を向けて育成力の強化だとか取り組む環境、そういった部分についても現状、先ほどご説明あった推進計画の中にそういった観点が十分に取られるよう示されているかと思いますけれども、指導の部分、それとあと施設関係の部分の中で、札幌市においてもウィンタースポーツ、競技によっては十分に自由に利用できないといった環境にある競技もあると競技団体の方からも聞いております。そういった競技施設関連の整備についてもですね、着実に進めていっていただきたいというふうに思うところであります。
新保副会長	北海道・札幌スケート連盟で会長をやってる新保でございます。 皆さんの意見、各競技団体の意見聞いてると、何かと問題になるのは施設の関係が一番だろうと思います。 私どもスケートの関係で言いますと、強化とか育成とかいろいろ、連盟の

	方で動いておりますけど、1972年に札幌オリンピックを開催したその後の札幌はどうだったかな、また北海道はどうだったかなと思います。 その後、札幌でオリンピックをやるっていう話が起きまして、具体的に施設を札幌市が打ち出した中に、私の専門はスピードスケートなんですけども、フィギュアもショートトラックもありますが、スピードスケートの会場が帯広に行ったということで、まず、肩がガクとした心境でございました。 今後、できることであれば、札幌市内のところで、どうしてもスキーなんかは山を作るわけにもいかない種目もたくさんあります。これは仕方なく、札幌以外の施設もあるけれども、私どものスピードスケートやフィギュアは平地があれば施設を作れる種目でございます。札幌のこの度の招致の中で、スピードスケートが帯広に開催を打ち出したときに連盟内で正直のところ、帯広の連盟内からもですけども、なぜ札幌でしないんだっていうようなことを言われた。そういう流れがあったんですけども、まず地元の連盟の若いこれからの人たちの連中も残念がってました。特に盛り上がりませんでした。 私からお願いすることは、このまま進んでいくのであれば、できるだけスピードスケートの会場は札幌市内のどこかで施設を作る方向で、これは今日の会議に私が行くっていうことで、若い連盟の幹部に相談した結果、強くそれだけはお願いしてくれっていうことを言付かってきました。あとは細かいことよりも、とにかくスピードスケートが施設も大きく費用もかかります。お金のかからない種目は冬はないんですね。だから必要なものであれば作って50年60年残るものを作っていくような方向性をお願いしたいっていうことが若い役員の方の連中の思いがございました。 今後よろしくお願いします。
勝木会長	各競技の連携というのをもっともっていききたい、クロスカントリーの会場を、時間を変えてバイアスロンにする。例えばうちのアルペン会場でパラの大会をする。それから、子供たちのクロスカントリーも同じコースをパラの人たちが滑る、そういうような連携をとって、今の運営部隊の人手不足にも解消していかない。それから場合によっては基礎体力作りについては、連盟を超えて共同でやっていくというようなことをしていかないと駄目だろうということと、私この会議を札幌市から継続の提案があったときに、あえて北海道の人、今日来ていただけてますけれど、北海道をきちっと位置づけして事務局に入っていただくというお願いをしました。 といいますのは、各大会は札幌近郊だけじゃなくて阿寒でやってみたい、名寄でやってみたい、名寄なんて今でも大きな大会をやってくれています。美深では国際選手を作る、エアリアルをやってくれています。そういう北海道でいろんな大会をやってくれて、ルスツがないと駄目だと大会もたくさんあります。

	そういう意味では、札幌市が今回オリンピックの延長でこういう会を開いてもらいましたけれど、あくまでも北海道全体でこの冬季スポーツを考えるんだという前提をしていただいて、今日も北海道スポーツ協会や各団体も北海道の所が出てきてもらってるということなので、必ずこの北海道、そして札幌を中心とした北海道をどれだけスポーツ天国にしていくかというのが大きな命題だろうというように私は思っています。 会場の問題が今出ましたけれど、ある意味でなんていうんですか、カーリングの会場も札幌だけじゃなくて、それからアイスホッケーは小樽にあるなど、そういう形でもいいじゃないかなというようにも思っております。 地域振興の地域を広くすればいいだけの話であって、そういう考え方もあるかなというふうに思ってます。以上私の個人的な意見です。 続きまして時間も迫りましたので、ウインタースポーツフェスタのことを事務局からお願いします。
6 議 事	(3) さっぽろスノースポーツフェスタ2025への協力について
中田部長	資料3に基づき説明
勝木会長	これは招致活動の一環として、街の中でクロスカントリーがやれないか、フランスはセーヌ川でヨットレースができるんだったら、札幌でも街中でクロスカントリーがやれないか、それがなかなか難しいなら、とりあえず真駒内からスタートして、豊平川の兩岸を走って、そして真駒内に帰れないか、ドームを使えないかと実証実験のイベントでありました。 ただ、オリンピックがなくなったとしても、こういう多くの市民が無料で見れるレースをやれないかということで、招致期成会からスポーツ局の方に移動してこれを行うということで、ぜひともご協力をしていただければと、バイアスロンの的を撃つのとかをいろんな人が見られる面白いですよ。ああいうことをやっていければと思っております。 この件、ご協力よろしくお願いします。 続きまして、総合型ハイパフォーマンススポーツセンター誘致についてお願いいたします。
7 議 事	(4) 総合型ハイパフォーマンススポーツセンター誘致への取組について
中田部長	資料3に基づき説明
8 閉 会	
勝木会長	ありがとうございました。本日より予定されたものは以上です。全体を通してご意見ご質問がありましたらお願いします。 最後に、本当にオリパラは停止ということで招致活動をやめておりますけれども、決して暗い団体にはなりたくないなというように思っております。

	将来に向けて、そして子供たちのために、そしてある意味で不自由な方にもためにも、スポーツ界は明るく元気にやっていきたいと思しますのでぜひともご協力をお願いいたします。 本日はどうもありがとうございました。
--	---